

梅雨の時期は、湿度により関節痛など起こりやすくなります。どうぞお気を付け下さい。

6月16.17.18日の3日間築地本願寺常例布教(法話会)のご縁を賜りました。わざわざご聴聞にお越しくださった方々には深く御礼申し上げます。終えますとやはり勉強不足、経験不足を強く感じます。浄土真宗の特徴は布教を重視するところにありますので、深くわかりやすい布教を目指し今後も精進するのみです。

さて、今回は親鸞聖人の布教生活でのある出来事を取り上げ味わってまいりたいと思います。

まず、ご自身ことをほとんど語らない親鸞聖人でしたが、以下の出来事は後に発見された奥様の恵信尼様のお手紙から明らかになったことです。

承元元年(1207)、承元の法難(念仏弾圧)により越後に流罪となられた親鸞聖人の本格的な布教が始まったのは流罪が赦された後の建保二年(1214)聖人42歳のころといわれています。その布教の行程は越後から常陸(茨城県)にむかったといわれています。その

途中、上野(群馬県)佐貫に滞在されたとき飢餓に苦しむ人々の為になんとかしてやりたいという衆生済度の思いから『三部経』を千回読もうとされたそうです。このことは、かつて9歳から29歳までの20年間比叡山のご修行中に身体にしみこんだ感覚から自然とそうされたのではないかといわれております。

『三部経』は慣れた方が早く読んでも2時間程かかるお経といわれております。当時比叡山の修行は100日ひとくくりの習慣であったと思われますので、ほぼ寝ずに100日で千回読もうとされたのではないかとの見方があります。比叡山での修行は一度行に入った後は止めることができず、止めるときはそのまま死を表しているともいいます。

しかし、親鸞聖人は千回読誦をはじめてまもない3、4日目に中止されました。もちろん既に比叡山の行者ではなかった聖人ですので死ななければならぬということもございませんが、なにより念仏ひとつで救われていくことを師である法然上人から教わりその他になんの不足もないと慶んで

いたはずの自分が、念仏よりほかにお経を千回読むことにこだわっていることと、比叡山の修行時代に教わった自力の行に功德があると思っている心がまだ自分に残っていたことに気付かれさぞ胸を痛められたことと思います。

『歎異抄』のお言葉に「いづれの行もおよびがたき身なれば」のいうお言葉がありますように親鸞聖人がその後の布教活動において徹底されたことは、本願他力、南無阿弥陀仏の救いを伝えることでありました。「いづれの行もおよびがたき身」とは、「自力の修行でとうてい仏に成れない私であります」という意味で、言い換えれば自分にはまったく人々を救っていく根本的な能力はないと言われていることとひとしく、そのことをはっきりと教えてくれる智慧のはたらきが阿弥陀様であり、また、南無阿弥陀仏の救いとは、孤独の中で苦しむ者に本当のいのちの世界を教えその世界で仏となりそこで初めてあらゆる苦悩のいのちを救ってゆけるはたらきが、いつでもどこでももたらされていることをしめします。 合掌